

五十音

○文法大要

(二) 五十音

我國の音は五十を以て本とす。之を一覽表に作りたるものを五十音圖といふ。左の如し。

あ行	か行	さ行	た行	な行	は行
あ	か	さ	た	な	は
い	き	し	ち	に	ひ
う	く	す	つ	ね	ふ
え	け	せ	て	ぬ	へ
お	こ	そ	ご	の	ほ
喉音	齒音	齒音	舌音	舌音	輕唇音

母音

(二) 母音 子音 鼻音

ま行	や行	ら行	わ行
ま	や	ら	わ
み	い	り	ゐ
む	ゆ	る	う
め	え	れ	ゑ
も	よ	ろ	を
唇音	喉音	舌音	喉音

音に母音、子音の二種あり。喉より直に出で、他の發音を助くるものを母音といひ。齒、舌、唇、鼻の助を借りて出で母音の助によりて發音し得るものを子音といふ。此間に立ちて或は母音の如く或は子音の如く「む」「ぬ」「う」等の音より變じ來れるものあり。之を鼻音といふ。「ん」これなり。母音に單母音、複母音の二種あり。單母音は「あ」「ア」「い」「イ」「え」「え」の如く長く引き得る聲。複母音は單母音の二つ「や」「行」「は」「い」「が」「や」となり「わ」「行」「は」「う」が「わ」となる如く重なりたるものなり。

子音

子音に單子音、複子音、拗音の二種あり。單子音は單母音に助けられて發音し。複子音、拗音は複母音に助けられて發音するものなり。

清音

濁音

重濁音

子音には又清濁の二種あり。「かきくけこ」「さしすせそ」「たちつてと」「はひふへほ」は清む聲にして之を清音と稱へ。「がぎぐげご」「ざじずぜぞ」「だぢづでど」「ばびぶべぼ」は濁る聲にして之を濁音と稱へ。「ぱびぶべぽ」は重く濁る聲にて之を重濁音と稱ふ。

音

母音

單母音 「あいうえお」

複母音

「やいゆえよ」

「わゐうゑを」

「かきくけこ」「がぎぐげご」

「さしすせそ」「ざじずぜぞ」

「たちつてと」「だぢづでど」

子音

單子音

「なにぬねの」

「はひふへほ」「ばびぶべぼ」「ぱびぷべぽ」

「まみむめも」

「らりるれろ」

複子音
(拗音)

にゃ

にゅ

にょ

ぢゃ

ぢゅ

ぢょ

しゃ

しゅ

しょ

じゃ

じゅ

じょ

きゃ

きゅ

きょ

ぎゃ

ぎゅ

ぎょ

ひゃ

ひゅ

ひょ

びゃ

びゅ

びょ

みゃ

みゅ

みょ

りゃ

りゅ

りょ

くわ

ぐわ

くま

ぐま

鼻音

(三) 假名 漢字

音は口に發して耳に聞き得るものゝ稱へ。之を目にて見得るやうに示すものを字といふ。我國の字に假名漢字の二種あり。假名は發音を示すを以て目的とする文字。漢字は意味を示すを以て目的とする文字なり。

假名

假名には平假名、草假名又は伊呂波假名、片假名又は眞片假名、眞假名の三體あり。(字體は別に示す)漢字には用法に正字、借字、熟字の別あり。

漢字

正字とは其文字と意味との離れぬものにて普通用ふる「天地」「日月」「山河」「犬猫」「勉強」「怠惰」の如きをいひ。借字とは其發音のみを借りて意味を借らざるものにて「目出度」「穴賢」の如きをいひ。熟字とは二字以上連ね用ひて一つの詞を讀むべき「時雨」「瞿麥」「七夕」の類をいふ。

(四) 轉音

口調の便宜によりて音の轉化するあり。之を音の轉用といふ。

通音

其一是通音
のをいふ。

同行の通音は左の例の如し。

原

か	せ	み	(風見)	ふ	ね	び	と	(舟人)	う	へ	ぎ	(上着)	め	ふ	た	(目蓋)	ふ	た	か	(二日)	な	な	か	(七日)	ち	い	さ	ま	(父様)
---	---	---	------	---	---	---	---	------	---	---	---	------	---	---	---	------	---	---	---	------	---	---	---	------	---	---	---	---	------

同列の通音は左の例の如し。

原

と	も	す	(燈)
---	---	---	-----

轉

か	な	ふ	ま	う	ふ	な	び	と	は	ふ	つ	ふ	な	い	さ	ま
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

轉

と	ほ	す
---	---	---

音便

其二は音便 子音を轉じて母音又は鼻音となしたるものをいふ。左の例の如し。

さ。び。し(淋)

か。ん。だ。ち。べ。(上達部)

を。み。な。べ。し。

さ。み。し

か。ん。だ。ち。め。

を。み。な。め。し

原

た。き。ま。つ(焚松)

で。か。し。た

し。た。ぐ。つ

て。み。づ(手水)

お。ほ。に。へ(大嘗)

つ。か。へ。ま。つ。る(仕奉)

い。ち。い。ち。が。い。ち(一々が一)

轉

た。い。ま。つ(松明)

で。か。い。た

し。た。う。づ(轆)

て。う。づ

お。ほ。ん。べ

つ。か。ん。ま。つ。る

い。ん。い。ち。が。い。ち

い	は	や	ま	と	あ	こ	た	く	あ
は [○]	は [○]	へ [○]	へ [○]	ふ [○]	ふ [○]	ひ [○]	ひ [○]	は [○]	は [○]
(五百)	(頬)	(八重)	(前)	(問)	(逢)	(鯉)	(鯛)	(鰒)	(粟)

い	は	や	ま	と	あ	こ	た	く	あ
ヲ [○]	ヲ [○]	エ [○]	エ [○]	ウ [○]	ウ [○]	キ [○]	キ [○]	ソ [○]	ワ [○]

此内「はひふへほを」わゐるゑを」と發音する詞のみは音便になりても文字を書き替へずして「あは」「たひ」の如く書き。他のものは音便になりたる時文字も發音に従ひて書き替ふるを法とす。

其三は畧音

有るべき音を抜き省くものを云ふ。左の例の如し。

原

うん[。]どん[。](飢餓)とき[。]けい[。](時計)やく[。]く[。]ん[。](薬罐)ふみ[。]づく[。]る[。](文机)か[。]せん[。](合戦)はら[。]あ[。]か[。](腹赤)さい[。]れい[。]い[。]し[。](礫石)やま[。]の[。]う[。]へ[。](山上)かせ[。]の[。]お[。]と[。](風音)さん[。]さん[。]が[。]く[。](三三が九)

轉

う[。]ど[。]ん[。]と[。]け[。]い[。]や[。]く[。]ん[。]ふ[。]づ[。]く[。]る[。]か[。]せ[。]ん[。]は[。]ら[。]か[。]さい[。]れ[。]し[。]やま[。]の[。]へ[。]かせ[。]の[。]と[。]さん[。]が[。]く[。]

其四は添音

餘計の音を加ふるものを云ふ。左の例の如し。

約音

原

にゐん(女院)

ひ な(雛)

む か(六日)

と び(鳶)

ふ ぶ(豊後)

きのくに(紀國)

ににがし(二二が四)

其五は約音 二音を合はせて一音とする者を云ふ。左の例の如し。

原

にぎたへ(和幣)

はたおり(機織)

みやぶ(宮振)

轉

にうゐん

ひ い な

む ゆ か

と ん び

ふ ん ぶ

きのくに

ににがし

轉

にぎて

はどり(服部)

みやび(雅)

もちあぐ(持上)

書きてあり

もたぐ

書きたり

其合はせ方は。先づ五十音圖により合はすべき二音の上の音たとへば「たへのた」を行にのみ動かし。下の音たとへば「たへのへ」を列にのみ動して見よ。必ず其二つの音の一つに出合ふ處あるべし。其出合ふ處の音すなはち約音になりたるなり。今「たへ」を約めて「て」となし。「ぶり」を約めて「び」となす例を左に示さん。字の間の連續線は其行に列に動きつゝ有るを示し。丸の中に圍まれ居る字は二音の出合ひたる處と知るべし。

た さ か あ

ち し き い

つ す く う

て せ け え

と そ こ お

延音

其六は延音 一音を延べ二音とするものを云ふ。全く約音の反對と知るべし。左の例の如し。

散 聞 見
 る。く。る。 } 原

散 聞 見
 ら。か。ら。 } 轉
 ふ。く。く。 }

わ	ら	や	ま	は	な
ゐ	り	い	み	ひ	に
う	る	ゆ	む	ふ	ぬ
ゑ	れ	え	め	へ	ね
を	ろ	よ	も	ほ	の

連音

其七は連音
云ふ。

清音が濁音に變化するものあり。左の例の如し。

立　い　申
　　ひ　　
　　け　　
　　る　　
　　す　　

立　い　申
　　た　　
　　け　　
　　ら　　
　　く　　

か　く　せ　さ　て　ち
　　き　り　い　ん　　
　　垣　栗　勢　算　　
　　(血) (手) (算) (勢) (手) (血)

た　か　ち　お　わ　ふ　は
　　け　ち　ほ　り　ど　な
　　が　ぐ　ぜ　ざ　と　ち
　　き　り　い　ん　こ　ち
　　(竹垣) (搗栗) (大勢) (割算) (懷手) (鼻血)

清音が重濁音に變化するものあり。左の例の如し。

は[○] ふ[○]
し(節)
ん(本)

こうたふし(小唄節)
かうしゃくぼん(講釋本)

は[○] ひ[○] ほ[○] へ[○] ふ[○]
く(服)
い(平)
ん(本)
き(疋)
し(敗)

ぐんぶく(軍服)
げんべい(源平)
げんぼん(原本)
じっぴき(十疋)
しっぱい(失敗)

「わ行」や「行」「わ行」の音が「ん」音の下に來る時は「な行」や「行」もしくは「に^ゃ」「に^ゆ」に「に^よ」「み^ゃ」「み^ゆ」「み^よ」の音に變化するものあり。左の例の如し。

あ
く(惡)

せんナく(善惡)

詰音

右の詞も發音の變はるのみにて文字は書き替ふる事なし。
其八は詰音 後の詞に續くため前の詞の尾音が息のみにて發音せらるゝものを云ふ。左の例の如じ。

が 原
も く。(學)
は く。(木)
く。(北)

がッ 轉
もッ かい。(學海)
はッ きん。(木琴)
こく。(北國)

あ。 け(明)
あ。 (亞)
をし。 敷
もち。 用
し。 強
み。 を(濫標)

あり。 け(有明)
あじ。 亞細亞
をし。 ュ
もち。 ュ
し。 ュ
み。 ぎ(濫標木)

右の詞の内、音が詰音になるものは字も「は」と「ほ」の如く書き替ふるを法とす。其他は發音の變はるのみにて書き替ふる事なし。

(六) 名詞

音によりて意味を表はすものを詞といふ。之を名詞、代名詞、動詞、形容詞、

げ	せ	は	ほ	が	せ	け	く	せ
き [○]	き [○]	ふ [○]	ふ [○]	ふ [○]	つ [○]	つ [○]	つ [○]	つ [○]
(撃)	(斥)	(法)	(法)	(合)	(絶)	(決)	(活)	(説)
げ ^ッ	せ ^ッ	は ^ッ	ほ ^ッ	が ^ッ	せ ^ッ	け ^ッ	く ^ッ	せ ^ッ
けん [○]	こう [○]	と [○]	し [○]	たい [○]	く [○]	しん [○]	わ [○]	ば [○]
(撃劍)	(斥候)	(法度)	(法師)	(合体)	(絶句)	(決心)	(活潑)	(説法)

副詞、數詞、後詞、助辭、發語、接續詞、感詞、枕詞の十二種とす。

名詞は物事の名を示す詞なり。たとへば。

山 水 魚 鳥

蝶 兔 日 月

勉強 講釋 戰爭 政事

神武天皇 鎮西八郎 大井川 東海道

名詞の下に置きて其意味を助くる詞あり。之を助名詞といふ。たとへば。

ら (子供ら)

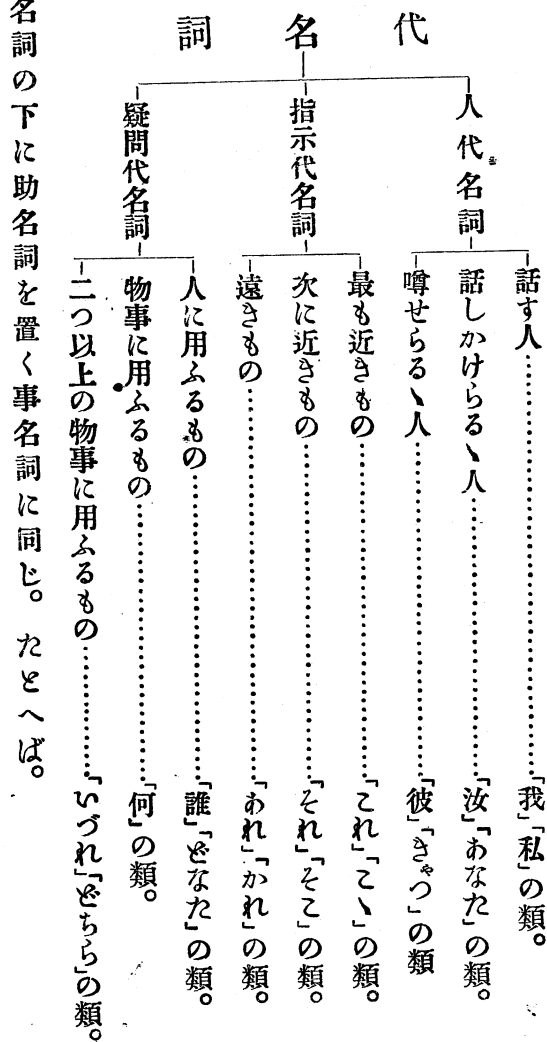
ぞ も(身ども)

ば ら(法師ばら)

た ち(姫君たち)

(七) 代名詞

代名詞は名詞の代りの役目を勤むる詞なり。其人のみに用ひらるゝを人代名詞といひ。物事を指し示すためのを指示代名詞といひ。疑問の意を示すものを疑問代名詞といふ。



代名詞の下に助名詞を置く事名詞に同じ。たとへば。

動詞

自動詞

我 彼 汝
ら° ら° た°
ち°

(七) 動詞

動詞は物事の働きをあらはす詞なり。自動詞、他動詞、助動詞の三種あり。自動詞は他の物事に働きを及ぼさぬ詞にて、をの詞を持ちたる名詞を前に要せぬものをいふ。たとへば。

眠	散	鳴	咲	消	老
る	る	く	く	ゆ	ゆ
.....					
「何を眠る」といふ事なし。	「何を散る」といふ事なし。	「何を鳴く」といふ事なし。	「何を咲く」といふ事なし。	「何を消ゆ」といふ事なし。	「何を老ゆ」といふ事なし。

他動詞

他動詞は之に反し他の物事に働きを及ぼす詞にて「を」の詞を持ちたる名詞を前に要するものを云ふ。たとへば。

重	消	成	蹈	飲	放	打	吐	書	借	見
ぬ	す	す	む	む	つ	つ	く	く	る	る
.....										
「日」を「等」の詞を要す。	「火」を「等」の詞を要す。	「業」を「等」の詞を要す。	「土」を「等」の詞を要す。	「酒」を「等」の詞を要す。	「矢」を「等」の詞を要す。	「犬」を「等」の詞を要す。	「唾」を「等」の詞を要す。	「字」を「等」の詞を要す。	「金」を「等」の詞を要す。	「花」を「等」の詞を要す。

被然言

乞 ふ……………「物を」等の詞を要す。

植 う……………「草を」等の詞を要す。

率 う……………「兵を」等の詞を要す。

但し「を」を持ちたる名詞又は其「を」文字を省きて文句の上に顯はさぬ事は常に多し。

他動詞を逆に用ひて他より働きを受くるやうにする言ひ方あり。之を被然言といふ。

普通の他動詞

〔花を〕見る

〔犬を〕打つ

〔火を〕消す

〔兵を〕率う

被然言

〔人に〕見らる

〔子供に〕打たる

〔風に〕消さる

〔大將に〕率ゐらる

助動詞

助動詞は動詞の下に置きて動詞の意味を補助するものなり。左の例の

如し。

助 動 詞

過去の時に置く……………	「き」「ぬ」「つ」「たり」「り」「けり」
自然言の時に置く……………	「る」「らる」
被然言の時に置く……………	「る」「らる」
他動詞の時に置く……………	「す」「さす」「しむ」
敬語の時に置く……………	「給ふ」「ます」「す」「さす」「る」「らる」「奉る」 「侍り」「候ふ」「申す」「聞ゆ」「まゐらす」
命令と願との時に置く……………	「よ」「べし」「たし」「なん」「ばや」
推量の時に置く……………	「ん」「まし」「べし」「らん」「らし」「けん」「めり」
意を確實にし又は餘情を添ふる時に置く……………	「なり」
打消の時に置く……………	「ず」「ざる」「じ」「まじ」「な」「なしそ」

(八) 形容詞

形容詞

形容詞は名詞、代名詞の意味を形容確定する詞なり。其特に尊敬を示すものを尊稱形容詞といひ。疑問を示すものを疑問形容詞といひ。之に

對して普通のものを常形容詞と稱ふ。

形容詞

常形容詞

赤 涼 尊 峨 々 かな た 高 大 なる きの きの きの
の類

尊稱形容詞

み お お お お お はん み みの類

疑問形容詞

如何なる「うづれの」

(九) 副詞

(十二) 後 詞

後詞は詞と詞との間の關係を示す詞なり。其特に意味の強弱を示すものを力後詞といひ。疑問を示すものを疑問後詞といひ。之に對して普通のものを常後詞と稱ふ。

後 詞

常後詞

力後詞

疑問後詞

「の」「が」「つ」
「を」「に」「へ」「と」
「て」「で」「つゝ」「ながら」
「ば」「ぞ」「ども」「とも」「と」
「より」「から」「まで」
「だに」「さへ」「すら」
「ばかり」「ほど」
「ものから」「ものゆゑ」
「み」

の類

「は」「も」「ぞ」「なん」「こそ」の類
「や」「か」の類

(十二) 助 辭

助辭は口調の助を爲し又意味の強弱を無言の内に生せしむるため或詞の後に用ふる調なり。たとへば。

人しなれば

折しも春の半ば

尊きろかも

ぬれてを行かん

(十三) 發 語

發語は口調の助を爲すため或詞の前に意味なく置く詞なり。たとへば。

いわたる月

かぐろき髪

さ夜更く

さを鹿

(十四) 接續詞

接續詞は別々の詞又は章句を一つに結び付る詞なり。たとへば。

および

ならびに

或は

又は

さては

(十五) 感 詞

接續詞

發語

感詞は感動して出づる聲又は自然に出づる聲をあらはす詞なり。之に文句の前に置くと後に置くと二種あり。

感 詞

前感詞……

「あな」「あら」「あゝ」「あはれ」
「や」「やあ」「あはや」「のう」
「いや」「すは」

の類

後感詞……

「や」「な」「も」「かし」「はや」
「か」「かな」「かも」「よ」「は」「を」

の類

(十六) 枕 詞

枕詞は和歌の五字の句の處に置きて次の句の或る詞に冠らしむる詞なり。其例左の如し。

有様を形容する……

「足引の」「(山)」
「草枕」「(旅)」
「岩ばしる」「(瀧)」
「蘆が散る」「(難波)」
「高光る」「(日)」

の類

枕

いひかけにする……

「梓弓」(春)

「天飛ぶや」(輕)

「うま酒を」(神南備山)

「唐衣」(日も夕暮)

「白雲の」(立田の山)

の類

詞

物によそへて言ふ……

「栲綱の」(白き)

「玉の緒の」(長き)

「もみぢ葉の」(散る)

「坂鳥の」(朝立つ)

「むらさきの」(にはへる妹)

の類

同調の音を重ぬる……

「あか星の」(飽かぬ心)

「あさち原」(つばらくに)

「ありそ海の」(ありて)

「降る雪の」(行きすぎがてに)

の類

(十七) 活用

動詞は語尾の變化すべきものとす。此變化を名づけて活用といふ。

用言

活用にて三種あり。一を用言活用といふ。其「か、き、く、け、さ、し、ず、せ」の如く五十音圖にて四段に變化するものを四段活用といひ。「き、く、ち、つ」の如く二段に變化するを上二段活用といひ。「け、く、せ、ず」の如く上二段よりは下段の二音に變化するを下二段といひ。「さ、し」の如く一音の動かぬものを上一段といひ。「け、へ」の如く上一段よりは下段の音を持ちて動かぬを下一段といひ。以上五種の活用より出で、不規則なるものを變格といふ。動詞に用ひらるゝものはなり。

形狀言

二を形狀言活用といふ。其「し、く」と變化するものをク活といひ。「し、しく」と變化するものをシク活といふ。形狀言副詞および助動詞に用ひらるゝものはなり。

特狀活用

三を特狀活用といふ。用言形狀言の變化の外にて助動詞にのみ用ひらるゝものを集めいふ稱へなり。

先づ其一覽を掲げて大體を示し而して後説明に移らん。

活												
二上					段四							
報	試	戀	落	起	去	編	思	待	増	書	階一第	
い	み	ひ	ち	き	ら	ま	は	た	さ	か		
ザ ル					デ ジ ズ							
い	み	ひ	ち	き	り	み	ひ	ち	し	き	階二第	
ケ リ					ヌ ツ テ							
ゆ	む	ふ	つ	く	る	む	ふ	つ	す	く		
マ ジ					ベ シ ラ シ ラ ン							階三第
る ゆ	む る	ふ る	つ る	く る	る	む	ふ	つ	す	く		
ヨ リ					ヲ ニ							
ゆ れ	む れ	ふ れ	つ れ	く れ	れ	め	へ	て	せ	け	階四第	
バ												

言											用	
段			二			下			段			
鑄	飢	流	絶	骨	堪	重	當	瘦	避	得	率	舊
い	ゑ	れ	え	め	へ	ね	て	せ	け	え	ゐ	り
	ナン(感)			バヤ(感)		バ(推量)		マシ			ン	
い	ゑ	れ	え	め	へ	ね	て	せ	け	え	ゐ	り
	ナン				キ			タリ			ケン	
いる	う	る	ゆ	む	ふ	ぬ	つ	す	く	う	う	る
	ヤ(感詞)			ヤ(疑問)		ナ(禁止)		トモ			ト	
いる	うる	るゝ	ゆる	むる	ふる	ぬる	つる	する	くる	うる	うる	るゝ
	カナ		カ(感詞)		カ(疑問)		ナリ		マデ		カラ	
れ	うれ	るれ	ゆれ	むれ	ふれ	ぬれ	つれ	すれ	くれ	うれ	うれ	るれ

言

用

活

格變行 ^リ	格變行 ^ナ	格變行 ^ラ	段一下		段	一上			
來	死 往	鳧 也 有	綜	蹴	居	見	干	煮	着
こ	な	ら	へ	け	ゐ	み	ひ	に	き

シム

き	に	り	へ	け	ゐ	み	ひ	に	き
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

ミ

ナ
ガラ

ツ、

く	ぬ	り	へる	ける	ゐる	みる	ひる	にる	さる
---	---	---	----	----	----	----	----	----	----

カ
シ

モ

ナ
(感詞)

くる	ぬる	る	へる	ける	ゐる	みる	ひる	にる	さる
----	----	---	----	----	----	----	----	----	----

ハ

カ
モ

くれ	ぬれ	れ	へれ	けれ	ゐれ	みれ	ひれ	にれ	され
----	----	---	----	----	----	----	----	----	----

ド
モ

其一 用言規則

第一則

第一階は「ず」「じ」「で」「ざる」「ん」「まし」「ば」「ばや」「なん」「しむ」に續く詞。たとへば「書かず」「増さじ」「待たで」「報いざる」「起きん」「落ちまし」「得ば」「避けばや」「鑄なん」「見しむ」の類。

用活狀特					言狀形		格變行さ
					しく 活	く 活	
					樂	白	爲
ず				せ	しく	く	せ
ハ(推量)				バ(推量)		ハ(推量)	
ず					しく	く	し
ケテ リ					ト モ	シ テ	
ず	けん	らん	ん	さ	し	し	す
	カシ	モ(感詞)	ナ(感詞)	ヤ(感詞)	ヤ(疑問)	ト	
ぬ	けん	らん	ん	し	しき	き	する
ね	けめ	らめ	め	しか	しけれ	けれ	すれ

自然言被然言又は敬語の形を作るには。

(四) 段

第二 則

第一階に「る」音を添へて用ふ。「書かる」「増さる」「思はる」の類。

(上) 下 二 段

第一階に「らる」音を添へて用ふ。「起さるる」「試みらる」「重ねらる」「嘗めらる」「見らる」「居らる」の類。

(變) 格

「ら行」變格「な行」變格は四段に準じ。「か行」變格「さ行」變格は二段一段に準ず。「有らる」「死なる」「こらる」「せらる」の類。

他をしてせしむる意味の他動詞又は敬語の形を作るには。

(四) 段

第三 則

第一階に「す」音を添へて用ふ。「書かす」「増さす」「思はす」の類。

(上) 下 二 段

第一階に「さす」音を添へて用ふ。「試みさす」「率ゐさす」「得さす」「兼ねさす」「見さす」「鑄さす」の類。

(變) 格

「ら行」變格「な行」變格は四段に準じ。「か行」變格「さ行」變格は二段一段に準ず。「有らす」「死なす」「こさす」「せさす」の類。「か行」變格「さ行」變格に限りて「き」の變化なる「し」「しか」の詞に續くるを得。たとへば。「こし」「せしか」の類。

則四第

第二階は「て」「つ」「ぬ」「けり」「けん」「たり」「き」「なん」「つゝ」「ながら」「み」に續く詞。たとへば「思ひて」「編みつ」「瘦せぬ」「當てけり」「絶えけん」「着たり」「有りき」「來なん」「しつゝ」「戀ひながら」「率ゐみ」の類。

・(四) 段)

第二階の語尾は「て」

「たり」に續く時轉音になるもの多し。

(上 下 二 段)

第二階の語尾決して轉

音になる事なし。

(變 格)

「り行」變格「な行」變格は

四段に進ず。

ありて……………あつて

死にて……………死んで

の類。其他は二段一段に進ず。

則五第

の類。

書。さて……………書いて
況して……………まいて
待ちて……………待つて
思ひて……………思うて
編みて……………編んで
去りて……………去つて

第六則

第二階は名詞の形を作るに用ふ。たとへば。
の類。
下書さ。倍増し。月待ち。物思ひ。手編み。置き去り。
寢起さ。片落ち。初戀ひ。憂瘦せ。胸當て。下重ね。
沙干。花見。討死に。今來。

第七則

第二階は他の動詞に續くる時に用ふ。たとへば。
の類。
書さ付く。待ち兼ね。思ひめぐらす。起きあがる。落ち込む。
堪へ忍ぶ。絶え續く。流れ入る。着替ふ。煮出す。
死に果す。來かゝる。

第八則

第二階は文句を假に切りて次へ續くる時に用ふ。たとへば。
の類。
姉は書をかき妹は唱歌をうたふ。朝早く起き夜遅く寝ぬ。
水流れ花落つ。月を見虫を聞く。

第九則

第二階の動詞の上に「な」音を下に「そ」音を置けば禁止の詞となるたとへば。
な書さそ。 な思ひそ。 な起さそ。 な戀ひそ。 な避けそ。 な當てそ。
な見そ。 なしそ。

第十則

第三階は「らん」「らし」「べし」「まじ」「めり」「と」「ども」「な」(禁止)「や」(疑問)「や」(感詞)「な」(感詞)「も」(感詞)「かし」に續く詞。たとへば。「書くらん」「増すらし」「起くべし」「報ゆべし」「重ぬまじ」「絶ゆめり」「鑄ると」「見るとも」「くな」「すや」「待つや」「けりな」「流るも」「有りかし」の類。

(變格)

「ら行」變格は他の格と變はりて「と」「ども」「や」(疑問)「な」(感詞)「かし」の外は此階より續かず。

第十

第三階は下に續くべき詞の無き時意味の全く切るゝ詞となる。たとへば。
字を書く。 簾を編む。 水落つ。 恩に報ゆ。 暑を避く。 中絶ゆ。

用言第四
階規則

則一

鐘を鑄る。魚を煮る。山有り。人く。
の類。

第二十則

第四階は「に」「を」「より」「から」「まで」「なり」「か」(疑問)「か」(感詞)「かな」「かも」「は」(感詞)に續く詞。たとへば。「書くに」「思ふを」「試むるより」「牽うるから」「得るまで」「當つるなり」「着るか」「けるかな」「來るかも」「するは」の類。

(變格)

「ら行」變格は以上の詞に續くるほか特に「らん」「らし」「べし」「まじ」「めり」「な」に續くを法とす。

第三十則

第四階は名詞に續くる時に用ふ。たとへば。
書く文字。待つ人。牽うる兵。流るゝ水。飢うる時。有る事。
死ぬる身。くる月日。する業。
の類。

第四十則

第五階は「ば」「ど」「ども」に續く詞。たとへば「増せば」「落つれど」「見れども」の類。

(變格)

「な行」變格の「ね」音は他の詞に續かず。

第五十則

命令の詞として用ふるには

(四段)

第五階を其まゝに用ひ。又は「や」「よ」を添へても用ふ。たとへば。

書け。書けや。書けよ。待て。待てや。待てよ。の類。

(上下二段)

第一階に「よ」音を添へて用ふ。

起きよ。落ちよ。得よ。瘦せよ。着よ。見よ。蹴よ。の類。

(變格)

「ら行」變格「な行」變格は四段に準じ。他の二變格は二段一段に準ずたとへば。

有れ。有れや。有れよ。いね。いねや。いねよ。の類。特に「な行」變格の「ね」音は命令にのみ用ひて他に用ふる事なし。

助動詞
音規則

俗語活用
規則

第十六則

(四 段)

過去をあらはす助動詞の「り」音は第五階に續けて用ふ。たとへば。

書けり
増せり
待てり
思へり
の類。

(上下二段)

此活用よりは助動詞の「り」音に續く事なし。

(變 格)

「さ行」變格は第一階に續けて用ふ。たとへば。

關係せり
勉強せり
の類。その他の變格は「り」音に續く事なし。

(四 段)

俗語にては第二階轉音に變ずる(第五則を見よ)のみにて他に變化なし。

(上下二段)

俗語にては上二段の活用すべて上一段に變化し。下二段の活用すべて下一段に變化す。左の如し。

(上下一段)

俗語にても變化なし。

(變 格)

俗語にては「ら行」變格「な行」變格の第二階轉用となる事四段に準ず。(第五則を見よ)其他は變化なし。

第

起 き
落 ち

起 き

起 き
落 ち

起 き
落 ち

起 き
落 ち

第一階は副詞にて「は」「推量」に續く詞。たとへば。「白くは」「楽しくは」の類。

則 七 十

其二 形狀言規則
第一則

飢流絶嘗堪重當瘦避(得)え	率舊報試戀
ゑれえめへねてせけ	ゐりいみひ
飢流絶嘗堪重當瘦避え	率舊報試戀
ゑれえめへねてせけ	ゐりいみひ
飢流絶嘗堪重當瘦避え	率舊報試戀
ゑれえめへねてせけ	ゐりいみひ
るるるるるるるるる	るるるるる
飢流絶嘗堪重當瘦避え	率舊報試戀
ゑれえめへねてせけ	ゐりいみひ
るるるるるるるるる	るるるるる
飢流絶嘗堪重當瘦避え	率舊報試戀
ゑれえめへねてせけ	ゐりいみひ
れれれれれれれれれ	れれれれれ

形状言第
二階規則

第二則

第二階は副詞にて「て」「して」「ともに」續く詞。たとへば。「白くて」「楽しくて」「白くして」「楽しく」ともの類。

第三則

第二階は副詞にて動詞、形容詞、又は他の副詞に續く詞。たとへば。「白く光る」「白く美し」「楽しく遊ぶ」「楽しく久し」の類。

第四則

第二階は音便にて「う」又は「しう」の轉音となる事あり。たとへば。「白う」「楽しう」の類。

第五則

第三階は形容詞にて「と」「や」「疑問」「や」「感詞」「な」「感詞」「も」「感詞」「かし」に續く詞。たとへば。「白しと」「白しや」「楽しな」「楽しも」「楽しかし」の類。

第六則

形状言第
三階規則

第三階は意味の全く切るゝ詞となる。たとへば。「月白し」「世は樂し」の類。

第七則

第三階は俗語にて

「く活は、い」となる。たとへば。

月が白い

花が赤い

「しく活は、しい」となる。たとへば。

世は樂しい

松は久しい

の類。

第八則

「しく活」第三階の語尾を「しゝ」と重ねて用ふる事あり。たとへば「たのしゝ」「うれしゝ」の類。

第九則

語尾の急なる時は、く活第三階の語尾を省きて用ふる事あり。たとへば「あなおもしろ」「おゝあつ」の類。

第十則

第四階は、「に」「を」より「から」「まで」「なり」「か」「疑問」「か」「感詞」「かな」「かも」「は」「(感詞)に」続く詞。たとへば「白きに」「白きを」「白きより」「白きから」「白きまで」「樂しきなり」「樂しきか」「樂しきかな」「樂しきかも」「樂しきは」の類。

第十一則

第四階は名詞に續くる時に用ふ。たとへば。「白き紙」「白き色」「樂しき日」「樂しき遊び」の類。

第十二則

第四階は、「い」「又は」「し」「の」轉音になる事あり。たとへば。「白い紙」「白い色」「樂しい日」「樂しい遊び」の類。

第十三則

第四階の語尾を省き「の」音にて名詞に續くる事あり。たとへば。「面白^〇けしきや」「樂^〇しの心や」の類。

第十四則

第五階は「ば」「ぞ」「ども」に續く詞。たとへば。「白ければ」「樂しければ」「樂しければ」の類。

第十五則

語尾を省きて「さ」「み」「げ」の音を添ふれば名詞となる。左の例の如し。

辛	厚	白	嬉	寒	白
み	み	み	しさ	さ	さ
澁	うま	深	久し	樂し	深
み	み	み	さ	さ	さ
.....「白き處」「うまき點」などの意。			「白き事」「樂しき事」の意。		

形状言
りの動詞

特狀第
一階規則

寒 げ 重 げ
樂 し げ 嬉 し げ

「寒さう」「樂しさう」の意

第十六則

語尾を省き更に「かり」の語尾を添ふれば動詞となる。左の如し。

白 かり 寒 かり 嬉 し かり
暑 がる いや がる
面白 がる を かし がる

「白くあり」「樂しくあり」の約。

「暑く思ふ」「面白く思ふ」の意。

其三 特狀活用規則

第一則

第一階は「せ」と「ず」の外用ふる事なし。「せ」は「推量」に續く時。「ず」は「推量」に續く時のみに限る。たとへば。「かくと知りせば」「今日來ずは」の類。

第二則

特狀第二
階規則

第二階は「ず」の副詞になる時又は「て」「けり」に續く時に用ふ。たとへば。「思はず。進む」「行かず。て」「見ずけり」の類。

第三則

第三階は「と」「や」「疑問」「や」「感詞」「な」「感詞」「も」「感詞」「かし」に續く詞。たとへば。「見き。と」「聞く。思はん。や」「聞く。らん。な」「行きけん。かし」の類。

第四則

第三階の「内」「ず」に限りて「ともに」に續く事あり。たとへば。「焼かず。とも。草は萌えなん」の類。

第五則

第三階は意味の全く切るゝ詞となる。たとへば。「去年の春なりき」「明日は行かん」「人や見るらん」「秋は來にけん」「月見えず」の類。

第六則

第四階第五階は總べての關係。用言、形狀言に變はる處なし。

特狀第四
階第五階
規則

係結

(十八) 係結

係結は上に置きたる詞のため切るゝ處の語尾に變化を及ぼすものを云ふ。其上に置きたる詞は係詞にして。其下に立ちて爲めに變化の及ぼさるゝるが結詞なり。

係詞

係詞に二種あり。一は「ど」「なん」「の」がの意味の「や」「か」「何」にして二は「こそ」なり。

疑問の係詞

係詞の内「何」といふは總べての疑問詞を代表せるものにて「など」「など」「いか」なる「いかに」「いかに」「いかに」「いかに」「いかに」「いかに」「いかに」「いかに」の類。皆之に含めりと知るべし。

係結を表に示せば左の如し。

ど	なん	の
---	----	---

こそ

や

か

何

係詞なき
時の結び

け	く	く
せ	す	す
て	ひ	ひ
く	ふ	ふ
ぬ	む	む
れ	る	る
へ	く	く
ひ	ひ	ひ
れ	ふ	ふ

四

段

活～活			特			狀		
し	し	し	ん	ん	ん	ん	ん	ん
ん	ん	ん	ん	ん	ん	ん	ん	ん
ん	ん	ん	ん	ん	ん	ん	ん	ん
ん	ん	ん	ん	ん	ん	ん	ん	ん
ん	ん	ん	ん	ん	ん	ん	ん	ん
ん	ん	ん	ん	ん	ん	ん	ん	ん
ん	ん	ん	ん	ん	ん	ん	ん	ん
ん	ん	ん	ん	ん	ん	ん	ん	ん
ん	ん	ん	ん	ん	ん	ん	ん	ん

第五階

第四階

第三階

今こゝに古人の用例を示して係り工合と結び工合とを會得し易からしめんとす。左の如し。(係結には口の印を付く)

四段結

第一例 四 段

野邊ちかく家居しせれば鶯の

なくなる聲は朝なく聞く

春霞たなびく山の櫻花

うつろはんとや色かはりゆく

君はたゞ袖ばかりをやくたすらん

逢ふには身をもかふとこそ聞け

四方山の冬のけしきになるまゝに

小野の炭竈けむり立ち増す

眞菅生ふる山下水にやどる夜は

月さへ草の庵をぞさす

訪ふ人も無き山里のあさぢふは

心のまゝにしげりこそませ

第二例 上二段

山めぐり時雨や過ぐる松風の

吹くかと聞けば軒の玉水

何しかもこゝなく戀ふる時鳥

鳴く聲きけば戀こそまされ

おりたてば身こそそほづれ春の田の

ふみかく事も今は止めてん

身のうさを忘草こそ岸に生ふれ

うべ住吉と海人もいひけり

下二段結

第三例 下二段

みむろ山紅葉ちるらし旅人の

菅の小笠に錦織り掛く

玉垣のみつの湊の春なれば

ゆきかふ人の花を手向くる

山櫻かすみこめたるありかをば

つらきものから風ぞ知らする

櫻こそ思知らすれ咲きにはふ

花も紅葉も常ならぬ世を

心をばわがこゝろこそ慰むれ

あらましごとの問はず語りに

五月雨にしをれつゝ鳴く時鳥

ぬれ色にこそ聲も聞ゆれ

第四例 變格

一ふしに恨みなはてそ笛竹の

聲のうちにも思ふこゝろあり

君をのみ思ひ越路の白山は

いつかは雪の消ゆる時ある

なご 我身下はもみちとなりにつけん

同じなげきの枝にこそあれ

鳥の子はまだ雛ながら立ちていぬ

かひの見ゆるはすもりなりけり

秋山の紅葉をかざし我居れば

夕汐みちく いまだあかなくに

夕暗は道も見ぬ故郷は

もと來し駒にまかせてぞくる

霞立つ春のやまべは遠けれど

吹きくる風は花の香ぞする

相坂の關にあがるゝ岩清水

いはで心に思ひこそすれ

く活結

第五例

く活

わが宿は雪ふりしきて道もなし

踏み分けて訪ふ人しなれば

のこりなく散るぞめでたき櫻花

ありて世の中はてのうければ

心こそうたてにくけれ染めざらば

うつろふ事も惜しからましや

第六例　しく活

いざこゝに我世は經なん菅原や

伏見の里の荒れまくをし

秋萩も色づきぬればきりくす

我寐ぬごとやよるはかなしき

月見れば千々にものこそかなしけれ

我身一つの秋にはあらねど

特狀結

第七例 特 狀

人言をしげみこちたみ逢はざりき

心あるごと思ふなわがせ

緑なる一つ草とぞ春は見し

秋は色々の花にぞありける

昨日こそ早苗とりしかいつのまに

稻葉そよぎて秋風の吹く

鏡山いざ立ちより見て行かん

年經ぬる身は老いやしぬると

夕月夜おぼつかなきを玉くしげ

二見の浦は明けてこそ見め

袖ひちて結びし水のこほれるを

春たつけふの風やとくらん

大原や小鹽の山もけふこそは

神代の事も思ひ出づらめ

君が經ん千代のためとぞ小松原

小鹽の山もいはひそめけん

唐衣立つを惜みしころこそ

三ひら山の關となりけめ

